

# 天使の顔をした娼婦か

—ルイーザ・ラベ「献辞」を試みに訳す—

宮下志朗

ある批評家に菩薩だと呼ばれた女性歌手がいて、引退した今もマスコミでは良妻賢母、ちょっとした「慈悲の聖母」扱いである。一方ここで問題にする女性も、子供こそなかったが「人間というよりむしろ天使の顔だ」と言われてもてはやされた。ところがここからが不思議で、彼女にはまったく逆の評価も存在する。「墮落しきった女」とか「巷の娼婦」などとひどい中傷を浴びせられているのだ。むろんルイーザ・ラベのことである。

「綱目屋小町」娼婦説の真偽を問うことはむなし。それは二つの意味においてむなしなのだ。まず第一に決定的な証拠がない。そして第二に、そのことで彼女の真の姿が見えてくるようにも思えないからである。

彼女の詩にもペトルキスムとか、プラトニスムといった、同時代に流行した修辞なりイデーが反映されている。そもそも詩はフィクションじゃないか。エレジー？エレジーは確かに自伝的なものとして読めるかもしれない。だけどこれだって、ヴィヨンの「兜屋小町」シリーズみたいなもの、あるいは沓掛さんがいうように小野小町でもいい。「私」が老婆ではないだけで、青春の恋と蹉跎という叙情詩の永遠のテーマが歌われてるのじゃないか。こんなふうを考えようと努めてはみる。

しかし分かっちゃいるけど、何とかというやつで、彼女の詩を読んでいると、この女はいったいどんな生きざまをしていたのか、気になって仕方ない。筆者のラベ体験は、こんなことの繰り返しだから、ちっとも進歩がみられない。

いずれにせよ一つだけ言えることがある。それは「天使の顔をした娼婦」と両者を合わせて、したり顔することの無意味さだ。「言葉の綾」のうちに彼女の実存を密閉してしまっは、申し訳が立たないではないか。

ところでフェミニズムの高揚とともに、ルイーザ・ラベはクリスチーナ・ド・ピザンなどと並ぶその道の先駆者として、現在注目されつつある。そうした観点からの注目すべきラベ論も登場している（〔ベリオ〕）。そしてこの「綱目屋小町」の詩の全訳までもついに出版された（〔沓掛〕）。そんなわけで、少しは腰をすえてラベに取り組んでみようと最近になって思い始めたところである。

さて彼女の実存や精神のありかに迫る手がかりだが、決して少ないわけではない。

一応整理しておこう。

1. まずは作品集。1555年にリヨンのジャン・ド・トゥルヌ書店から上梓され、翌年改訂版が出されている。唯一の著書であるこの『作品集』の、具体的な内容は意外に知られていないから、紹介する。

- ・「献辞」
  - ・「痴愚女神と愛の神の諍い」
  - ・「哀歌(エレジー)」3編
  - ・「ソネ」24編(最初の1編のみイタリア語)
  - ・「ルイズ・ラベに捧げる歌」24編(ギリシア・ラテン・イタリア・フランス語):ラベの作品と同数であることに注目。作者はさまざまだが、不明の詩も多い。
  - ・最後に 国王の特認(1554年3月13日)が添えられている(現行歴では1555年)。
2. 「遺言書」(1565年4月28日): トマ・フォルティーニ宅にて。トマはフィレンツェ出身の銀行家で、彼女の恋人ともいわれる。
  3. 同時代の証言: 十人以上残っている。「証言」というよりは「悪い噂」が多く、ラベ=娼婦神話は、もっぱらこの資料体に由来する。特に有名なのが巷で歌われたであろう「リヨンの綱貝屋小町の新しい歌」と題されたシャンソンである。

なおフランソワ・リゴロの校訂版は、以上1.2.3.の内容を一般読者にまるごと提供したという意味で画期的なものといえよう。

4. 「綱貝屋小町通り」という名称: 『リヨン鳥瞰図』と呼ばれる同時代の都市図にこの名前が見られる。本人がまだそこに住んでいる頃から、この袋小路が「綱貝屋小町通り」と命名されていた事実は意味深長だ。
5. 古文書類: ラベの父親・兄弟、夫に関するものなど。

ここではとりあえず『作品集』のいわば序文にあたる「献辞」を、拙訳でお目かけよう(1556年の改訂版を底本とし、適宜改行した)。

#### A M.C.D.B.L.<sup>(1)</sup>

マドモワゼル<sup>(2)</sup>、男性方の厳しい<sup>厳格な</sup>法<sup>ほう</sup>も、もはや女性が学問に励むことを妨げることのできない、時代が到来したのです<sup>(3)</sup>。そうする条件に恵まれている女性は、わたしたち女性<sup>(4)</sup>が以前あれほど望んでいたこの誉れある自由を、学問を修めることに活用すべきだと、私は思います。そして男たちが、学問を修めることによって生まれるはずの利益と名誉とを、わたしたち女性から奪うという過ちをおかしてきたことを、彼らに教えてあげましょうよ。自分の考えを文章にできる、それも入念に行なうことができる、そして栄光をないがしろにすることなく<sup>(5)</sup>、ネックレスや指輪や豪華な服などでな

しに、その栄光で身を飾るレベルに到達できる女性だっているのだ、ということをもたれに見せてあげましょうよ。そうした身を飾るものは、使いこまなければ、本当に自分たちのものとはみなせません。しかし学問がわたしたちにもたらす名誉というのは、完全にわたしたちのものとなるでしょう。しかもその名誉は、泥棒のずるがしこさ<sup>99</sup>をもってしても、敵の力をもってしても、また時の長さをもってしても奪われることはないでしょう。

もしも私が精神が欲したものを取るのに十分な器量を、天から授かっていたら、ここで私はこんなアドバイスをするよりも、実例で示すことでしょう<sup>100</sup>。けれども私は、若い頃の大部分を音楽の稽古ばかりして過ごしてしまい、私に残された時間は、私の粗雑な理解力のせいもあって、もはや少なすぎると分かっています。ですからわたしども女性がその美しさのみならず、学問や徳においても男性に追いつき、追い越すのを見るという、私がわたしたち女性に託してきた希望を、自分ではかなえられそうにないのです<sup>101</sup>。したがって、私としては、勇気ある女性が紡錘竿や糸巻き棒からほんの少し上方に精神を持ち上げることを、ひたすら祈るしかありません<sup>102</sup>。そしてたとえわたしたちが命令を下すようには造られていないにせよ、さりとてそれで、家庭のことで、公のことで、女性を支配し従わせてきた男性方の伴侶として軽蔑されるいわれはないのだと、世間に分からせるよう頑張っていたきたいのです<sup>103</sup>。

そうしてくだされば、わたしたち女性が評価されるばかりでなく、今まではほとんど何事につけても女性より優れていると自負していた男たちも、女性に追い越されてはたまらないと不安に駆られて、学問にもっと励み精進することとなり、社会全体にも貢献することになるでしょう<sup>104</sup>。

ですからわたしたちは、このかくも称賛にあたいする試みに向かって、お互いに刺激しあう必要があります<sup>105</sup>。あなたの精神にはすでに多くの多彩な資質が宿っているのですから、あなたの精神をこの試みから遠ざけるようなことがあってはなりませんし、惜しんでもなりません<sup>106</sup>。学芸がそれを育んだ人々に、常にもたらしてきた名誉を得るため、あなたの青春や運命があなたの身に与えた才能を惜しんではならないのです。

栄光と名誉に次いで勧められるものといえば、文芸を学ぶことが常にもたらしてきた喜びが、わたしたちを励ましてくれるはずで、その喜びはそれ以外の気晴らしとはまったく別物です。その他の気晴らしとは、自分が思う存分享受してしまえば、あとは誇れるものといったら、暇をつぶしたとぐらいのものです。ところが勉学という気晴らしは、自己に対する満足感をもたらしてくれますし、それはいつまでも長く残ります。というのも、過去とは現在にもまして、わたしたちを喜ばせ、役立ってくれるものなのです。一方、感覚的な喜びとは、たちまち失われてしまい、決して二度とは戻ってこないものなのです<sup>107</sup>。しかもその行為が歓喜にみちたものであれば、なおさら時としてその思い出はつらいものとなります。

おまけに学問以外の快楽は、たといかなる思い出がもたらされようとも、だから

といってその思い出が、その時の気持ちにわたしたちを立ち戻らせてくれるわけではありません。わたしたちは、頭のなかにくら強烈な印象を刻みつけようとも、それがわたしたちを感わし、だます過去の幻影にすぎないことを知っているのです<sup>(19)</sup>。

しかしながら、もしも考えたことを文字で書き留めておけば、その後、頭のなかで無数の事柄に思いをめぐらせて、思い乱れるようなことがあっても、長いこと経ってから自分が書いたものを再び手に取ってみれば、その時そうであった地点、その時の気持ちに立ち戻れるのです。

その時わたしたちは、喜びを二倍にすることができます。というのも、自分がその時どんなことを書いていたのかというだけでなく、夢中になっていた学問についてどんな知識を持っていたのかが分かり、わたしたちは過ぎ去った喜びを再び見いだせるのですから。さらに、最初に考えていたことに対して、これを振り返った時に考えたことが判断を下すわけで、これがわたしたちにたぐいまれなる満足感を与えることにもなります。

ものを書くことでこうした二つの幸福がもたらされるのですから、あなたもその気になるはずです。第一の幸福は、他の行為や生き方すべてとちがいが、書くものにはかならず付随するはずだと、あなたも確信しているでしょうね。第二の幸福についてですが、それはあなたが書くものが、後々あなたを満足させるかどうかにかかっているわけで、幸福感を持つも持たぬもあなた次第ということになりましょう。

私の場合、初めこれら若い頃の作品<sup>(20)</sup>を書いている時も、またそれを後で見なおした時も、もっぱらまともな暇つぶしや無為を逃れる手段を求めていたにすぎません<sup>(21)</sup>。ですから私は、自分以外の誰かがこれを見る羽目になるとは思っていませんでした。しかしその後、友達の何人かがどういうわけか、知らぬ間にそれを読んで、私にそれを出版すべきだと信じ込ませたのです<sup>(22)</sup>。人間というのは、褒められるとすぐその気になってしまうものなのですね。私は友人の勧めにあえて異を唱えませんでしたけど、その代わり、「本を出すことで生じる恥の半分は、あなたがたにかぶっていただくわ」と脅かしておきました<sup>(23)</sup>。

それに女性たるもの、あたらし一人で人様の前に出るものではありませんから、私のガイド役にあなたを選ばせてもらい、このささやかな作品を捧げることにしました<sup>(24)</sup>。この作品を捧げるのは、私が常々あなたに託してきた希望をはっきりと伝え、私の荒削りで拙い構成の作品をご覧になって、それに刺激されて、もっと磨きのかかった、魅力あふれる別の作品を世に送ってみたいものだわという気持ちを、あなたに起こして欲しいからなのです。

ご自愛くださいね。

1555年7月24日、リヨンにて  
あなたの友、ルイーズ・ラベ

- (1) A Mademoiselle Clémence de Bourges Lionnoise の略。「リヨン女性クレマン・ド・ブルジュ様に」。クレマン・ド・ブルジュ (1530頃-1562?) はリヨンの名門の令嬢とされる。16世紀の書誌学者デュ・ヴェルディエは彼女を「リヨン女性のなかの真珠」と形容している。フィアンセのジャン・ド・ペイラはリヨン防衛隊長を務めていたが、1562年のユグノーによるリヨン占領時に死んでしまう。クレマンはそのショックから世を去ったとも伝えられる。いずれにせよ彼女の作品は残されていない。

ではなぜ献辞の相手を名指ししなかったのか？ むろん両者の暗黙の了解のもとに、こうした暗号めいたものにした可能性もある。この種の言語遊戯は流行していたのだから。

しかし事実がどうであれ、ラベはこの時すでに「墮落した女」というレッテルを貼られていたのだ。とするならば献辞で名指しされた相手も、同類と誤解されかねないではないか。

ところでジャン・ド・トゥルヌ書店刊の初版(1555)には、二種類の刷りが存在する。筆者はまだ自分の目では調査していないが、[ジュディチ, p.11]によれば、ヴァリエーションはこの「献辞」にのみ存在するという。したがって著者によるこの「印刷中の訂正」は、重みをもって来る(ただしそのほとんどが綴り字レベルの訂正)。初刷(?)をA<sup>1</sup>、第2刷(?)をA<sup>2</sup>と略称する。

この個所では不思議なことに、A<sup>2</sup>ではA.M.C.D.B. となって、Lが脱落している。翌年の改訂版では復活する。おそらく単なる誤植であろうが、「リヨン女性」の有無を有標とみなす論者もいる[ベリオ, p.183]。

なおこれは余談だが、リルケは『マルテの手記』で「ジャン・ド・トゥルヌが1556年に刊行した小型の本」と書いている。詩人は初版本の存在を知らなかったらしい。

- (2) この時代だと「無爵位の貴族の妻・娘」あるいは「町民の妻・娘」を意味するが(関西弁の「御寮はん」を連想させる)、ここでは前者。網具職人の妻ルイズ・ラベの社会的ランクは後者である。この両者が献辞で結ばれている事実には、やはり自由都市「リヨンの風土」(アントワヌ・デュ・ムーラン)があざかっていて[デュ・ギエ, p.3]。
- (3) ジャン・ド・トゥルヌ書店で編集に腕をふるったアントワヌ・デュ・ムーランは、『ペルネット・デュ・ギエ夫人詩集』(1545)で「リヨンの貴婦人に寄す」という序文を書いている(以下デュ・ムーラン「序文」と略す)。そこでデュ・ムーランは、命なかばにして燃えつきたデュ・ギエを悼みつつ、才能ある女性よ発奮せよと、リ

ヨン女性を激励している。都市リヨンにはその条件が整っているというのである  
[デュ・ギエ, pp.1-4]。

ラベの「献辞」と実作は、このデュ・ムーランの「序文」に対する返歌と見立ててもおかしくはない。述語・措辞においても共通項が散見する。

なおジャン・ド・トゥルヌ書店の編集者は1553年からペルティエ・デュ・マンにバトンタッチしているが、ラベ『詩集』巻末を飾る「ルイズ・ラベを讃える詩」(24篇)の一つ(第21番,「オード」)は、デュ・ムーラン作と推定されている。

- (4) «notre sexe». ラベは *Débat* でも *ta jeunesse, ton sexe, ta façon de faire* という言い方を用いてはいる(リゴロ, p.50, l.6)。しかしこうした表現自体、かなり突出したものと感じられる。ただしデュ・ムーラン「序文」では «votre sexe» と呼びかけていた!

なおこうした個所には、アグリッパ・フォン・ネッテスハイム(1486-1535)の『女性の優越性について』との関連が指摘できそうだ。

「女性とは実に弱く、変わりやすく、気まぐれで、定まらず、不完全なもの」というロンディビリスの言葉(ラブレ『第三之書』32章)が、当時の一般的な女性観であった。つまり女性とは本来劣等な生きものというわけだ。ところがアグリッパの議論の立て方は、まったくもってユニークなものである。彼は男女は本質的に同等の存在と規定する(その論拠は、本来完全であるはずの神が、最後の被造物たる女性を不完全に造ったとしたら論理矛盾だ、等々)。その上でアグリッパは、女性を「自然の法に反して」劣等な地位におとしめているのは、「男性側の専制」であって、彼女たちは「糸と針以外のことに首を突っこむこと」を禁じられているだけなのだと現状を認識する。そして教育の重要性を指摘したのである。『第三之書』のヘル・トリッパ先生のモデルとされるこの医師は、1524年から1527年までリヨンで医術に従事している。そのラテン語著作『女性の優越性について』(アントウェルペン, 1529)は、翌年には仏訳されて、1537年、リヨンのフランソワ・ジュスト書店から発売されている。

- (5) 「名誉」が現世的な誉れだとすれば、「栄光」とは後世の誉れである。『痴愚女神と愛の神の諍い』(リゴロ, pp.68-70)を参照。

モンテーニュは『エッセ』II・16/17章で「栄光」について否定的に語っていた。「われわれの栄光とはわれわれの良心が判断する」(「コリント書簡」I・12)というのである。「わたしたち女性」の立場を代弁するラベの場合、それ以前の社会的差別を問題にしているから、むしろ「栄光を軽んずる」のはマイナスに働くと認識していることになる。ラベがモンテーニュの文章を読んだなら、どのような反応を示したことだろう?

- (6) デュ・ムーラン「序文」では *larron de l'honneur* 「名誉泥棒(女性の貞操を盗む者の意味もある)」という表現が使われている。

- (7) 確かにマロ作といわれる頌詩でも「ルイズは楽神も認める声を持ち、いとも巧みにリュート奏でる手を持つ」と歌われている[リゴロ,p.160]。「哀歌」には自伝的な趣きを感じられ、このラベ流の「兜屋小町の悔恨歌」の3番では、「マルスと知」にのみ向けられていた若き日の私を「愛の神」が捕らえた、「愚かな青春期の若気のおやまちよ」と告白がなされている。またデュ・ムーラン「序文」でも、デュ・ギエがリュート、エピネットなどの楽器の稽古に身を捧げたこと、「死神」がデュ・ギエの才能の開花をさまたげたことが強調されている。

しかしラベが「お稽古ごと」だけで、あたら青春をむだに過ごしたとは思えない。以下はどう考えても、「謙遜のトポス」であろう。

なお注(5)でモンテーニュに触れ、パウロ書簡を引用したが、「謙遜のトポス」の起源をパウロに求める説が存在するという(クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路・岸本・中村訳,みすず書房,pp.597以下)。

- (8) 繰り返すが、ラベが後世に残した文学的成果は、この『作品集』だけであった。彼女はこの献辞を書いた後も、10年ほど生き続けるのに、詩作などは行なわなかったのだろうか？ だとすればこの献辞は、ルイズ・ラベの「文学的遺書」ということか？

- (9) もっとも有名な一節。フェミニズム関係の文献等でも、しばしば引用されている。最近のものを2点挙げておく。ナタリー・デーヴィス『愚者の王国 異端の都市』成瀬・宮下・高橋訳,平凡社,p.106/ミシェル・ペロー『フランス現代史のなかの女たち』福井・金子訳,日本エディタースクール,p.104。

糸巻き棒と紡錘が女性・主婦のシンボルであることはいうまでもない。エラスムス『対話集』の「結婚生活」*Coniugium*でも夫に脚立で対抗する Xanthippe に、Eulalia は「槍の代わりに紡錘竿 colus」を持って完璧だなどと言っている(中公版,p.227)。また *tomber en quenouille* 「(王権などが)女の手委ねられる」という表現も存在した(ニコ『仏語宝典』)。なお当時、家庭の主婦や農婦の「生活の知恵」を集成した作品が持てはやされていた(15世紀半ばの成立と推定される)。これが *Évangiles des Quenouilles* で、揺籃本のマティアス・フス版を皮切りに、リヨンで幾度か上梓されている(ごく最近批評版が出た)。

ちなみに詩王ロンサールに「紡錘竿」(1559)という作品がある(『ロンサール詩集』高田勇訳,青土社,pp.212-213)。

「勇気ある女性たち」は *les vertueuses Dames* の訳。「有徳の」とするのは疑問だが、さりとてどういうイメージで用いられているのか？「意識の進んだ」、「開かれた」という感じか？ さしずめ「翔んだ女性」というところかも。

- (10) 「リヨンの女権拡張運動(フェミニズム)ならびに 女性論争」というコンテクストに置き直してみる必要がある[ベリオ,p.282]。ラベが今生きていれば、「ジェンダー」という用語を使い議論を展開したにちがいないが、これについては他の機

会に譲る。

なお「たとえわたしたちが命令を下すようには造られていないにせよ」という修辞文については、[ペリオ ,p.171 以下]を参照。

- (11) この個所については[ペリオ ,p.311]を参照。
- (12) 「お互いに刺激しあう必要があります」と訳した個所が、A'では nous faisons armer とずいぶん強いイメージになっていた。
- (13) 「資質」gracesがA'では「イデー」idéesに、「惜しむ」espagnerがA'では「気をそらせる」distraireとなっていた。
- (14) 感覚に由来する快楽を束の間のものとして、知的快楽の永続性と対立させるのは、ギリシア・ローマ以来の伝統的な観念。
- (15) 「印象」は imaginacion の訳。「過去の幻影 ombre」がA'では「過去の印象」となっていた。

この前後は、プラトン『国家』第9巻の「真実の快楽と虚偽の快楽」に関する議論を想起させる。例えば「(欲望・名誉・知)の三種類の快楽のうちで、われわれがそれによって物を学ぶところの魂の部分がもつ快楽こそが、最も快い」、あるいは「彼らがなじんでいるさまざまな快楽というのも、苦痛と混じり合った快楽にすぎず、真実の快楽の幻影であり、陰影によってまことらしく仕上げられた書割の絵のようなもの」といった一節である(『プラトン全集 11』岩波書店, pp.658-677)。

もっともいわゆる「典拠探し」をするならば、フィチーノによる『饗宴』の注解を挙げないわけにはいかない(『恋の形而上学』左近司祥子訳, 国文社)。この著作の仏訳あるいは、フィチーノのプラトニズムを換骨奪胎したアントワーヌ・エロエの作品が当時持てはやされていたことは言うまでもない。

- (16) 原文は ces jeunesses. 果たしてラベの作品は若き日の産物であり、それがかなりの期間篋底に秘められていたということなのだろうか。アンリ二世の「特認」にも「彼女がずっと以前より書いてきた」とある。

もう一つのヒント。「哀歌3」に16才の冬にならぬ頃に愛の神に捕まり、もう13回目の夏が来てしまった、といった内容が記してあること([掛指 ,p.89]の「三度目」は誤植)。つまり「哀歌3」は「私」が29才くらいの時に書かれたと推定できなくはない。

もっともルイーズ・ラベの生年が不明(一応 1515-23の間とされているが)なのは、捜査も行きづまりだが。

- (17) 「無為」を逃れるために「書く」といえば、誰でも『エッセー』第1巻8章「無為について」を思い出すはずだ。この両者の結びつきはトポスとも考えられるが、そこにはラテン語 otium の閑暇・学問という二重の意味が前提となっている。

「無為」は16世紀の一つのキーワードだ。「無為」がプラスに働けば作品が生まれる。生産と結びつかないマイナスの「無為」、つまり乞食や放浪者は無用之介と

して排除される。

(18) これまた序文・献辞に特徴的な「よそわれた謙遜」のトポスである。マロ『クレマンの青春詩集』の「献辞」(1530年8月12日、パリ)も同工異曲である[マロ、p.45]。またデュ・ベレー『オリーヴ』初版(1549)の「読者へ」では、原稿が友人の手から手を経て印刷屋に渡ってしまったとある。

(19) 上記マロの「献辞」には「あなたがたのおかげで作品を公刊することになったのだから、もしも非難を浴びたら、その半分はあなたたちの責任ですからね」とある。

そういえばヴィヨンの場合は「すべての恥辱を飲み込んだ(→恥も外聞もなくす)」(『遺言』1)のであった。

(20) デーヴィスによれば、16世紀フランスで、読み書きもできぬのが当たり前の平民階級出身の女流詩人はラベだけという。しかも、かのマルグリット・ド・ナヴァールでさえ、『エプタメロン』の公刊をためらったのに、ラベは「対話篇」という下位ジャンルの作品を巻頭に置こうというのだ。「献辞」でできるだけ謙虚にふるまって、世間(男たち)の攻撃を未然に防いでおかなければ。

それにしても「女性たるもの、あたら一人で人様の前に出るものではありませんから」とわざわざ書きつけるところなど、ラベの芯の強さがうかがわれる。

---

#### 参考文献 [ ]は略称

Louise Labé, *Œuvres complètes*, éd. François RIGOLOT, GF, Flammarion, 1986. [リゴロ]

Louise Labé, *Œuvres complètes*, éd. Enzo GIUDICI, Droz, T.L.F. 292, 1981. [ジュディチ]

Karine BERRIOT, *Louise Labé, la Belle Rebelle et le François nouveau, suivis des Œuvres complètes*, Seuil, 1985. [ベリオ]

Pernette du Guillet, *Rymes*, éd. Victor E. GRAHAM, Droz, T.L.F. 152, 1968. [デュ・ギエ]

Clément Marot, *L'Adolescence clémentine*, éd. Frank LESTRINGANT, Poésie/Gallimard, 1987. [マロ]

Luce GUILLERM etc, *Le Miroir des femmes*, 2 vols, P.U. de Lille, 1983-84.

沓掛良彦『焰の女ルイーゼ・ラベの詩と生涯』白馬書房/風の薔薇, 1988. [沓掛]

(後記) かつて二宮先生は『『痴愚女神と愛の神との諍い』を教室で読み始め、かたわら翻訳の準備にかかったのは1968年春のことだったが、やむをえない事情で一時中止のまま現在に至った』と書かれた(『ふらんす手帖1号』)。ぼくは70年代に学部でルイーゼ・ラベの詩を、大学院でこの対話作品を教えていただいた世代である。もっとも必ずしもまじめに教室に出たわけではなく、今フランス・ルネサンスを専攻

しているのが不思議な気もする。

最終講義でも、先生はアグリッパ・フォン・ネッテスハイム『女性の優越性について』を取り上げられていた。その方面への関心とところざしは持続してるな、とぼくはにらんだ。

ラベの詩については、沓掛良彦氏の立派な翻訳が上梓された。だから拙訳が「ちよっとした刺激物」(アントワーヌ・デュ・ムーラン)となり、先生が『痴愚女神と愛の神との諍い』の翻訳を完成されることを願って、こんな雑文で責めをふさがせてもらった。何とんでも先生は、上に引用した一節に続けて、「来年あたり余暇を得て始末をつけたいと希望している」と、ご自分で書かれているのである(07/09/1989)。(追記) 脱稿後しばらくして拙著『本の都市リヨン』(晶文社)を上梓することができた。そこではラベのことを幾度か引き合いに出したし、「リヨンの綱具屋小町の新しい歌」は試訳を載せておいたので、あわせてお読みいただきたい(05/04/1990)。